

# 英語総合 I ・ 歴史 I 合同授業実践報告

## — 英文学作品を用いた資料読解のもたらす効果について —

原田 桃子\*\*  
Momoko HARADA

### 概 要

本稿は、英文学作品を用いた英語総合 I と歴史 I との合同授業の実践報告、および合同授業の効果を検討したものである。合同授業は、シェイクスピア『ヴェニス商人』の原典を資料とし、その読解を通して、英語圏の文化への関心の引き出し、歴史的事象への理解を同時に達成できるかを目的として行われた。合同授業の結果、歴史的事象への理解は達成できるものの、英語圏の文化へ感心を引き出すまでには至らなかった。一方、通常の授業よりも集中して取り組めた学生の割合は半数を超えた。その理由として通常の授業とは異なる合同授業の目新しさが挙げられる。一種の行事感覚で受けられる合同授業は、学生の授業に対する姿勢を改善する効果を持ち得る。

### 1. はじめに

昨今、外国語を用いて授業を行う内容言語統合学習 (Content and Language Integrated Learning, 以下, CLIL) や英語による専門科目の指導 (English-Medium Instruction, 以下, EMI) が注目を集めている。米子工業高等専門学校 (以下, 本校) でも、今年度は、グローバル人材育成事業の一環として、パハン大学 (マレーシア) からファイズ・ビン・モハマッド・トゥーラン准教授 (本校電子制御工学科卒業生) を講師として招聘し、EMI を行った<sup>1</sup>。工業高等専門学校 (以下, 高専) の学生の多くは専門科目への学習意欲が高く、EMI は学生に将来グローバル社会で働く技術者になるという意識を持たせる有効な手段だろう。また、英語に対する苦手意識を持つ学生であっても、EMI により「自分の想定よりも英語で授業が理解できる」といった成功体験を通じ、英語に対する苦手意識の軽減が期待できる。

ところで、EMI で用いられる英語は、「共通語としての英語」 (English as a lingua franca) として使われる。つまり、EMI では英語の第一言語を異にする者同士のコミ

ュニケーションツールとしての側面が強調される。しかし、英語をツールとして捉えると、その英語という言葉が育まれた英語圏の生活様式や文化といった、言語に付随する背景を知るまでには達しない。だが、英語をツールとして割り切って学習するよりも、英語が持つ面白さや英語が使用される社会の文化に触れながら英語学習を進めることで、英語に苦手意識を持つ学生に対し、別の角度から英語学習に関心を持たせるきっかけになり得ると考えられる。これは英語に対する興味、関心が高い学生にとっても、さらに英語学習への意欲を高められる効果があるだろう。そして、学生が英語圏の文化という「異文化」に触れることは、世界の多様性を認識し、今日のグローバル社会の課題である異文化理解への第一歩になると考えられる。

もちろん、EMI は英語圏の文化への関心を高める目的を持つ教育法ではない。英語という言葉を通して、英語圏の文化を学習するには「英米文学」など文学関連の科目が適切だろう。文学の原典に触れ作品を味わうことは、その作品が生まれた地域への関心を引き出しやすい。しかし、

\* 原稿受理日 平成 31 年 1 月 15 日

\*\* 教養教育科

<sup>1</sup> 平成 30 年 12 月 10-21 日, 電気情報工学科全学年,

電子制御工学科全学年, 機械工学科 3 年, 物質工学科 5 年を対象に実施。

本校は「英米文学」を5年生対象の選択科目として開講しており、低学年が英米文学に触れる機会は少ない。

他に、様々な地域の文化を学習できる科目として「歴史」がある。本校では、歴史は1, 2年生を対象に開講され、世界史の授業を行っている。歴史では、世界の成り立ちの基本的な事項について、歴史的に見ること、考えることを到達目標としており、授業では、その時代の時代性や地域性への理解を促している。各時代、各地域の文化は、どの出版社の高校歴史教科書であっても取り上げられており、英米文学作品を授業で紹介できる。その文学作品の言葉の持つ面白さや意味、背景の説明は歴史教員には難しい。しかし、その文学作品に描かれている場面が、基本的な歴史的事象の場合、その文学作品を資料として用い、資料読解を通して学生にその事象の深い理解を促すことはできる。歴史教育における資料読解の重要性はこれまでも指摘されている<sup>2</sup>。文学作品を資料として授業を行うこと自体は、文学を専門としない歴史教員であっても可能な範囲だ<sup>3</sup>。

以上をまとめて考えると、英米文学を専門とする教員（外国語科教員等）の協力があれば、英米文学作品の原典を用いて資料読解を行わせ、同時に英米文学の持つ面白さや英語圏の文化に触れられる授業が展開できるだろう。

そこで、外国語科教員と社会科教員と合同で、英米文学作品を用いた資料読解の授業を試みた（以下、合同授業）<sup>4</sup>。対象授業は英語総合Ⅰと歴史Ⅰで、ともに1年生対象科目である。平成29年度は平成29年11月7日（火）（対象1年機械工学科、全46名<sup>5</sup>）、平成30年度は平成30年11月8日（木）（対象1年建築学科、全40名）に実施した<sup>6</sup>。

1年生にとって、英米文学の原典の読解は難易度が高いという指摘もあるだろう。しかし、題材を選べば1年生にも十分読解可能な作品は存在する。敬遠されがちな文学作品を「自分の想定よりも英語で理解できる」と思える

ような成功体験を経験させること。これは、前述の通り、英語を苦手とする学生の意識改善に繋がる可能性がある。だが、英米文学の持つ面白さを含めた原典による資料読解の指導は、外国語科教員の協力無しでは困難である。だからこそ、社会科（歴史）教員と外国語科教員両名による授業を行う必要がある。

合同授業の目的は、第一に英語圏の文化（英米文学）に対する関心を引き出すこと、第二に歴史的事象に対する理解を深めることである。この二点の目的を合同授業により達成できるか。本稿は、これまでの合同授業の授業実践を紹介し、合同授業の効果を検討する。

## 2. 合同授業での使用資料の選定

前述の通り、英米文学の原典を用いた読解は、合同授業の対象である1年生には難易度が高いと捉えられる可能性がある。また、合同授業の目的に合う資料でなければならない。

そこで、今回は、ウィリアム・シェイクスピア『ヴェニスの商人』（William Shakespeare, *The Merchant of Venice*）を採用した。その理由は、主に二点挙げられる。

第一に、シェイクスピアが、高校世界史で重要な人物として取り上げられるだけでなく、広く一般的に知られる人物だからである。高校世界史の教科書では、単元「ルネサンスと宗教改革」にて「イングランドでは、（中略）エリザベス朝期の最大劇作家シェイクスピアは『ハムレット』などを書いて活躍した」と紹介される<sup>7</sup>。また、ある副教材は、シェイクスピアを近代英文学の祖として紹介している<sup>8</sup>。シェイクスピア作品は演劇だけでなく映画化もされ、日本においても馴染み深い劇作家だ。親しみやすい作家を取り上げることで、英米文学を身近に感じられるように、シェイクスピアを取り上げた。

第二に、『ヴェニスの商人』が中世ヨーロッパの都市社会をよく描いており、宗教の多様性と宗教を理由とする

<sup>2</sup> 原田智仁「「思考力・判断力・表現力」をつける授業づくりのポイント」福井憲彦・田尻信壹編著[2012], 49-54 ページ。

<sup>3</sup> 児童文学を題材とした授業として、風間睦子が、アミーチス「アペニン山脈からアンデス山脈へ」『クオレ』1886年刊を用いた授業デザインを紹介しているが、邦訳で内容を提示している（風間睦子「マルコと考える「移民の世紀」」福井憲彦・田尻信壹編著[2012], 69-75 ページ）。

<sup>4</sup> 外国語科では本校教養教育科酒井康宏教授、社会科では筆者が担当した。

<sup>5</sup> 当日欠席者1名

<sup>6</sup> なお、平成29年度は世界史A（使用教科書は岡崎勝世ほか『明解 世界史A』帝国書院、2017年。）だが、平成30年度は世界史Bに変更している（使用教科書は、木畑洋一、松本宣郎ほか『世界史B 新訂版』実教出版、2018年）。

<sup>7</sup> 『世界史B 新訂版』実教出版、2018年、194ページ。なお、教科書は「シェイクスピア」と表記しているが、本稿では「シェイクスピア」とした。

<sup>8</sup> 第一学習社『グローバルワイド 最新世界史図表』2017年、192ページ。

差別の問題を取り扱える題材だからである。『ヴェニスの商人』の主人公アントーニオは貿易商であり、主人公が対立するユダヤ人シャイロックは金貸し業を営んでいる。こうした登場人物の設定や話のなかから、中世都市社会を構成する人々の特徴がよくわかる。また、宗教の多様性および宗教を理由とする差別については、ユダヤ人差別の問題が見られる。『ヴェニスの商人』では、ユダヤ人であるシャイロックは金の亡者として印象悪く描かれている。また、アントーニオや他の登場人物のシャイロックに対するセリフは非常に侮蔑的な表現に満ちている。シャイロックの描かれ方に見られるユダヤ人観は決してシェイクスピア独自のものではなく、当時のヨーロッパの人々にとっての共通意識だった<sup>9</sup>。アントーニオらのシャイロックに対する反応もまた同様である。中世ヨーロッパ都市におけるユダヤ人差別の問題は、高校教科書にも掲載してある<sup>10</sup>。中世ヨーロッパ都市社会の状況、キリスト教徒、ユダヤ教徒それぞれの価値観、そしてキリスト教徒の信仰に基づく差別など、『ヴェニスの商人』は様々な歴史的事象を理解する上で最も適した資料だろう<sup>11</sup>。

また、中世ヨーロッパ都市社会を学ぶために、『ヴェニスの商人』を用いると、ルネサンスでシェイクスピアを学ぶ際に復習となるため、知識の定着を期待できる。

以上の理由で、合同授業の題材に、シェイクスピアの『ヴェニスの商人』を選択した。

使用場面は、第1幕第3場より、アントーニオがシャイロックに金を貸すよう頼みに行った際、シャイロックがアントーニオなどからこれまで受けていた差別について口にするシーンである。シャイロックのセリフからは、自らが「犬」と呼ばれ、「唾をふっかけ」られたことなど、シャイロックを含むユダヤ人へのアントーニオら非ユダヤ人のヨーロッパの人々による侮蔑的な行動が見受けられる。そこから、中世都市社会におけるユダヤ人差別の事例を読み取ることが可能だ。

英語学習では、特に以下の場面が説明に使いやすい。

Say this :

“Fair sir, you spet on me on Wednesday last,

You spurn'd me such a day, another time

You call'd me dog: and for these courtesies

I'll lend you thus much moneys”?

(I. iii. 120-125)

この場面は、call の文法や、lend と類語 rent の使い分けなど、高専1年生を対象とした英語の授業の文例として使用できる。また、セリフ全体を通して、韻の踏み方等文学的な要素の説明も可能だ。

そこで、合同授業の目的に合わせ、『ヴェニスの商人』による資料読解の合同授業の目標を、二つ設定した。第一に『ヴェニスの商人』や他のシェイクスピア作品、また他の英文学への関心を引き出すこと、第二に、中世ヨーロッパ都市社会のユダヤ人差別の状況をシャイロックのセリフから感じ取り想像できることである。この二つを目標に、約30分の合同授業を行った。

なお合同授業では、中世ヨーロッパ都市の形成とユダヤ人差別についてまとめたプリント(以下、プリント①)、および『ヴェニスの商人』第一幕第三場のシャイロックのセリフの原文を左側、邦訳を右側に掲載したプリント(以下プリント②)の計二枚を学生に配布した。

### 3. 合同授業の流れ

以下、合同授業の流れを説明する。

#### 1. 歴史 I での事前学習 (45 分)

歴史 I の単元「ラテン＝カトリック圏の拡大」において、中世ヨーロッパの都市社会を説明する。その際、都市社会を形成する集団の多様性や、ユダヤ人の存在と宗教的観点による差別について教科書をもとに事前に授業を行う。

なお、平成30年度では、授業日数の関係上、合同授業よりも先に次の単元「ラテン＝カトリック圏の動揺と秩序の変容」の学習に入った。その際『ジャン・ル・ベル年代記』の邦訳から、黒死病の流行による人々の混乱とユダヤ人差別との関連性について読み解く授業を行った<sup>12</sup>。

#### 2. シェイクスピア『ヴェニスの商人』の場面等説明 (10 分)

プリント①で、事前に学習した中世ヨーロッパ都市の形成とユダヤ人差別についての復習を行う(担当: 歴史教員)。その後『ヴェニスの商人』のあらすじや、演劇・映画でのシャイロックの描かれ方の説明を説明した(担当: 教員兩名)。

その後、学生にプリント②の英文を読ませる時間を取り、ある程度目を通させる。そして、プリント②の文章を使い、授業の復習(文法、単語の使用例)やセ

<sup>9</sup> 斎[2003], 192 ページ。

<sup>10</sup> 『世界史 B 新訂版』実教出版, 149 ページ。

<sup>11</sup> なお、『ヴェニスの商人』の文学的意義等は本稿の目

的に合致しないため、言及しない。

<sup>12</sup> 『ジャン・ル・ベル年代記』の邦訳は歴史学研究会編 [2007], 62-64 ページ。

リフの韻の踏ませ方等の英語独特の言い回しなどを説明する（担当：英語総合 I 担当教員）。

### 3. 学生による資料読解（10分）

「シャイロックのセリフのなかから、差別的な表現を抽出してみよう」という課題を学生に提示し、プリント②を用いて検討させる。その際、プリント②の邦訳を見ても良いとした。

### 4. 学生による発表（5分）

差別的な表現が使われているセリフを学生数名に発表させ、クラスで共有する。

### 5. まとめ（5分）

概ね意見が出尽くしたところで教員兩名によるまとめを行い、授業を終了する。

## 3. アンケート結果の分析

平成 29 年度、平成 30 年度ともに、合同授業実施日の翌週の歴史 I の授業でアンケートを実施した。アンケート項目は以下 8 項目である<sup>13</sup>。なお、括弧内に表記したグラフ番号がその回答結果である。

設問 1. 「今回の合同授業の感想を教えてください」（グラフ 1）

設問 2. 「今回の合同授業は、通常の英語総合 I ・歴史 I の授業よりも集中して取り組みましたか」（グラフ 2）

設問 3. 「今回の合同授業の難易度を教えてください」（グラフ 3）

設問 4. 「今回取り上げた中世都市のユダヤ人差別について理解できましたか」（グラフ 4）

設問 5. 「今回の合同授業を終えて、中世都市の関連書籍を読んでみようと思いましたか」（グラフ 5）

設問 6. 「今回の合同授業を終えて、『ヴェニス商人』を読んでみようと思いましたか」（グラフ 6）

設問 7. 「今回の合同授業を終えて、ほかのシェイクスピア作品を読んでみようと思いましたか」（グラフ 7）

ほか、英文法や英単語の使用例を主に扱った平成 29 年度では、それに対する理解度を、韻の踏み方等文学作品の特徴について主に扱った平成 30 年度は、英文学への親し

みを覚えたかを聞いた。また、英語総合 I、歴史を問わず合同で授業を受けてみたい教科の組み合わせや、合同授業に対する率直な感想を自由記述欄に記入させた。

アンケートの設問目的は、以下の通りである。

設問 1. 合同授業満足度

設問 2. 合同授業に対する集中具合

設問 3. 難易度

設問 4. 資料読解により歴史的事象を理解できたか

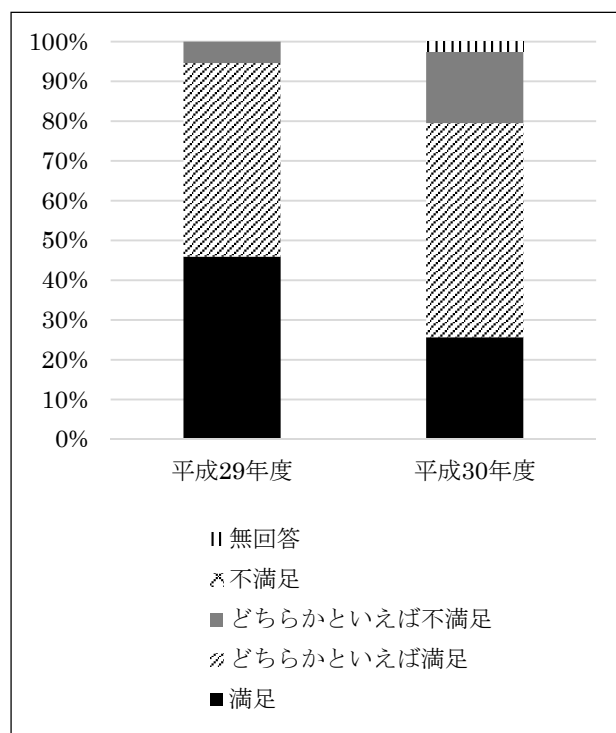
設問 5. 資料読解により対象地域の歴史や社会に関心を引き出せたか

設問 6. 資料読解により英文学への関心を引き出せたか

設問 7. 同上

以下、アンケート結果から平成 29 年度と平成 30 年度を比較し、分析を行う<sup>14</sup>。

まず、合同授業への満足度についてである。合同授業への満足度は「満足」「どちらかといえば満足」を含め、平



【グラフ 1】 合同授業への満足度

<sup>13</sup> 無記名によるアンケート。なお、平成 29 年度は、平成 29 年 11 月 10 日に実施し（アンケート実施日 9 名欠席）、平成 30 年度は平成 30 年 11 月 15 日実施（アンケート実施日 1 名欠席）。設問の順番等は、年度によって

異なる。

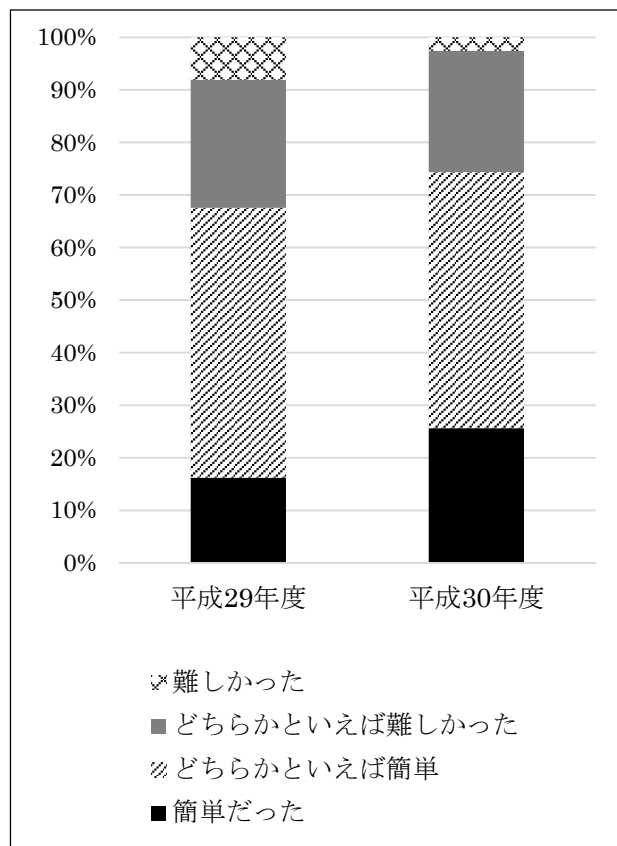
<sup>14</sup> 本稿では、アンケートの自由記述欄からは原文のまま抜き出した。また、自由記述欄すべては紹介しない。

成 29 年度では 95%，平成 30 年度では 80% となった。自由記述欄には「別々でよい」という意見は両年度とも出されたが、「不満足」と答えた者もおらず，合同授業の実施とその内容については，概ねの学生から高評価を得ていると捉えて良いだろう。自由記述欄には「意外な組み合わせで楽しかった」（平成 30 年度）「意外と面白かったので，このような授業が少しずつ増えていったら授業も楽しくなると思います」（同上）といった意見が見られた。

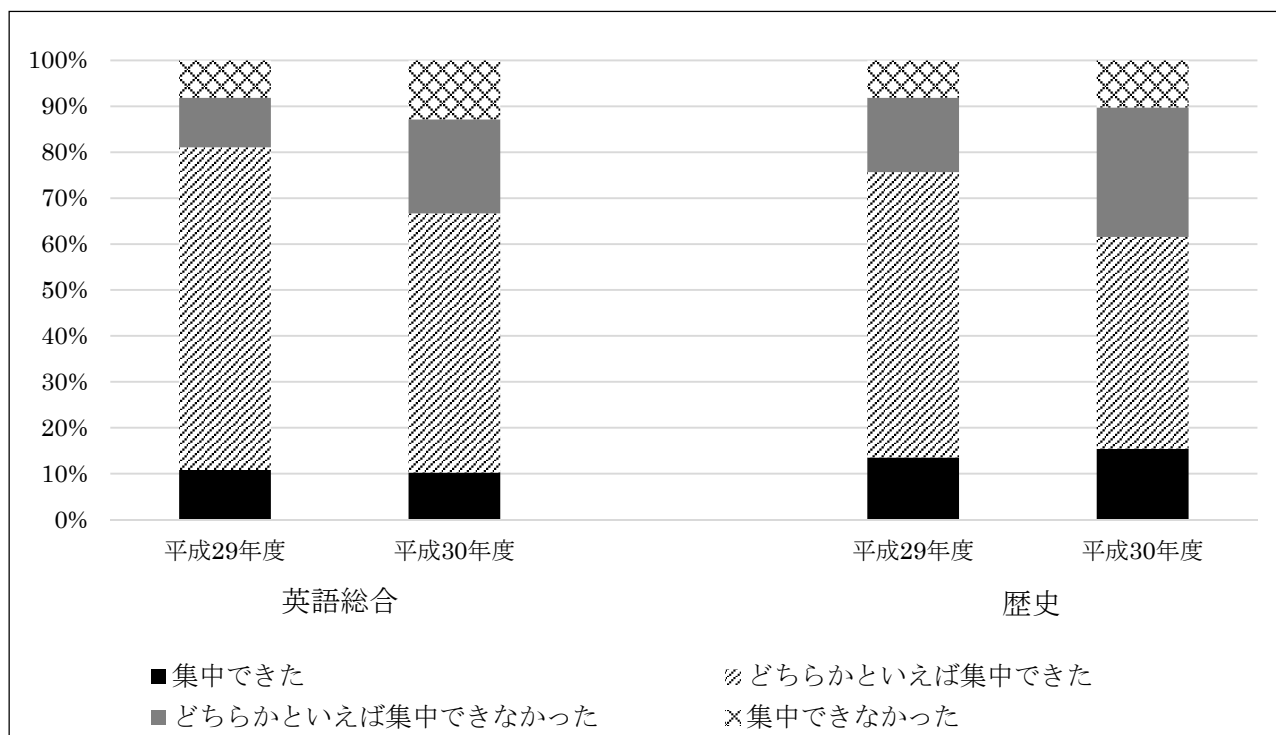
一方，「どちらかといえば不満足」と答えた割合は，平成 29 年度に比べ平成 30 年度は 5% から 18% に増えた。この要因として，授業に対する集中度合いと難易度が関係していると考えられる。

まず，授業に対する集中力，姿勢の差である。グラフ 2 を見ると，英語総合 I および歴史 I の通常の授業に比べ，合同授業にはどのくらい集中できたかという問いに対し「集中できた」「どちらかといえば集中できた」と答えた割合が，平成 29 年度から平成 30 年度では，英語総合 I では 81% から 66% に，歴史では 76% から 61% へと，10% 以上低くなっている。実際，平成 30 年度には自由記述欄に「眠かった」と答えた学生もいた。

次に，難易度である。平成 29 年度も平成 30 年度も合同授業に内容に大きな差は無かった。しかし，グラフ 3 をみると，平成 29 年度の対象学生が「簡単だった」「ど



【グラフ 3】 合同授業の難易度



【グラフ 2】 合同授業への集中度（通常授業と比較）

らかといえは簡単だった」と答えた割合が67%に対して、平成30年度の対象学生は75%と増えている。なお、グラフ4を見てみると、中世ヨーロッパ都市におけるユダヤ人差別についての理解度は「理解できた」「どちらかといえば理解できた」を含めて、どちらも90%以上である。

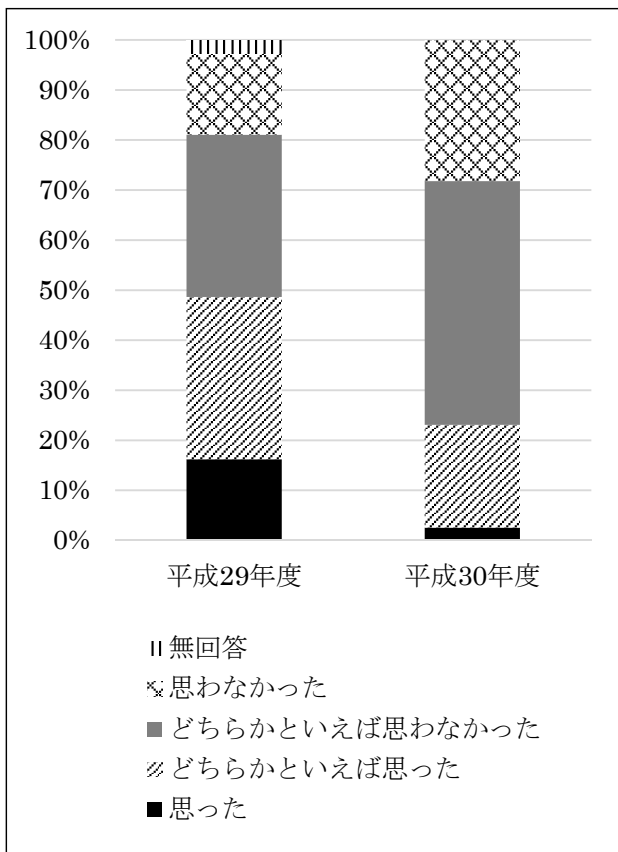
この値を見れば、合同授業の第二の目的である資料読解による歴史的事象の理解は達成している。しかし、難易度に対する回答も含めて考えると、内容が簡単過ぎて、学生が物足りなさを感じ、集中力の低下を招いている可能性がある。実際、学生からは「思っていたより内容が簡単だった。せっかくやるのならば、もう少し時間をとって、内容も濃い講義を聞きたい。内容は面白かった。」(平成30年度)という意見があり、内容には満足していても、難易度に不満があるようだ。対象クラスの学力などを見極めながら、課題の難易度を変えていく必要がある。

他に、平成30年度は、先に『ジャン・ル・ベル年代記』の資料読解によってユダヤ人差別の問題を取り扱っていたことも、難易度への不満と関係しているだろう。『ヴェニス商人』は英文を提示したとはいえ、資料読解を通して再び中世ヨーロッパにおけるユダヤ人差別を考えるこ

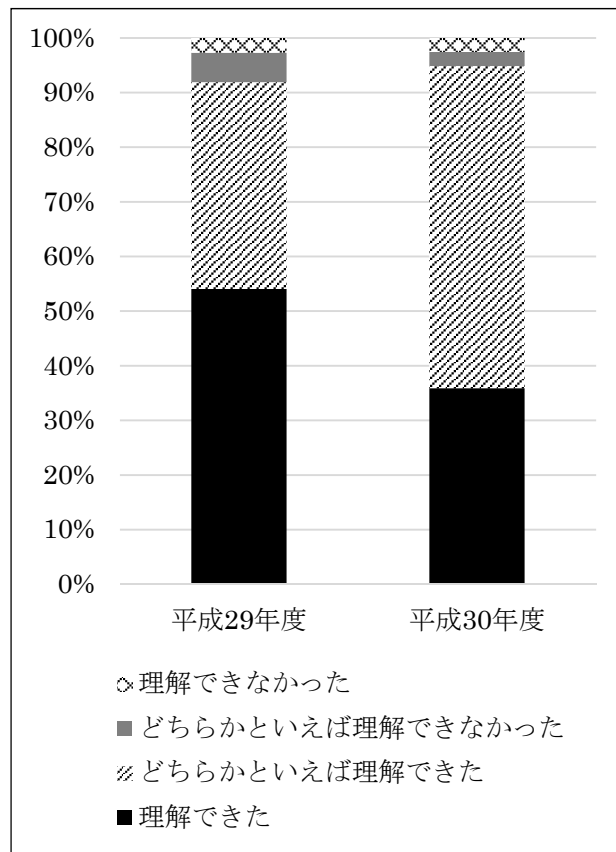
とになり、平成30年度対象学生にとっては話題の新規性に乏しかったといえる。課題の目新しさは授業に対する姿勢に関係しており、合同授業の資料選定と授業の実施時期には注意しなければならない。

また、合同授業を受けて、さらに中世都市について文献を読む等自ら勉強したいと考える学生は少なく、対象の地域の歴史や社会(今回は中世ヨーロッパ都市)に関心を引き出せなかった(グラフ5参照)。

第一の目標として掲げていた英文学作品への関心の引き出しについて検討する。グラフ6および7を参照すると、他のシェイクスピア作品だけでなく、『ヴェニス商人』そのものを読みたいと思う学生は、平成29年度と比べて、平成30年度は大幅に減った。平成30年度は、英文学の読み方についての説明を増やしたにもかかわらず、その効果は薄いようである。設問5も含め、資料読解からその対象地域や資料に使われる言語の文化にさらに関心を持たせられなかった理由は、今回のアンケート結果から考える限り、やはり授業への集中度の低さが関係していると思われる。関心を高める方法として、授業の流れのなかで、教員側から具体的に他の文学作品等を紹介す



【グラフ4】 中世ヨーロッパ都市のユダヤ人差別への理解度



【グラフ5】 中世ヨーロッパ都市関連書籍を読みたいと思ったか

る時間を設け、学生が作品を手に取りやすい環境をつくる工夫も有効と思われる<sup>15</sup>。

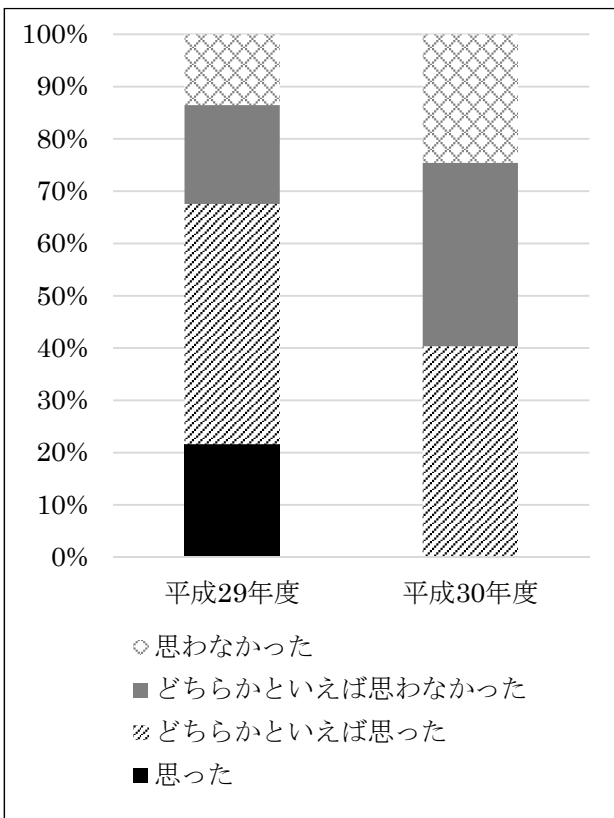
以上、アンケート結果の検討を通して見えてきた課題は、やはり学生に授業にいかに関心させるかである。その解決策として、難易度の設定を対象クラスの状態に沿って変化させ、課題に目新しさを持たせる必要がある。

また、合同授業の流れのなかで、学生自らが考える時間や学生同士で話し合う時間を持たせること、そしてそれを教員が促していくことも必要だ。今回の合同授業はCLILのように授業そのものを英語で教えてはいないが、CLILの実施にあたっては協同学習の重要性が指摘されている<sup>16</sup>。合同授業でも本文の英語を学生同士で読み合わせたり、グループによる発表を行わせたり、学生自らが動く時間を確保し、学生により主体的に考えさせることで、授業への集中力も高まると期待できる。

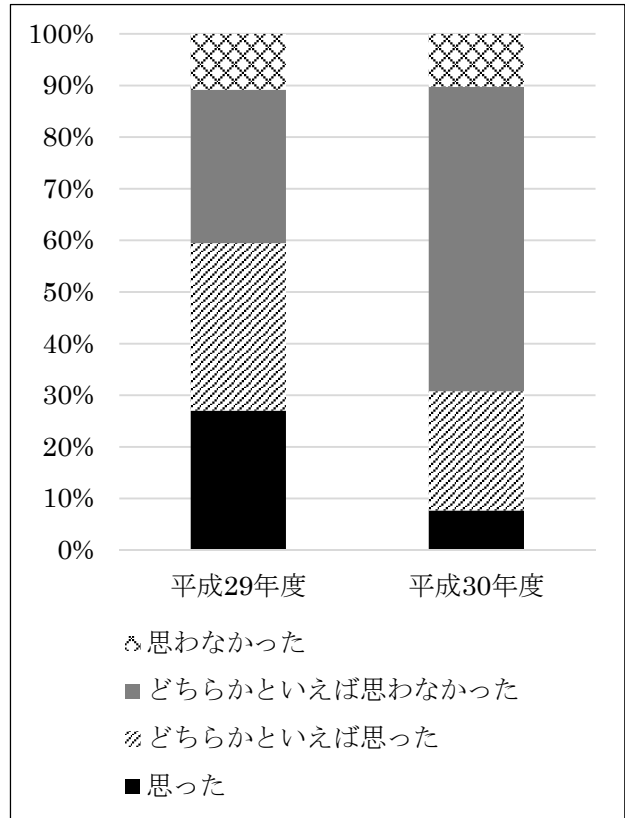
ただし、合同授業の課題として見えてきた授業への集中具合については、グラフ2を再度見直してみると、平成29年度から平成30年度にかけて集中度が低下してい

るとはいえ、通常の授業よりは集中できたと答えた学生は、「どちらかといえば集中できた」と答えた学生も含めると半数以上に上る。つまり、概ねの学生は、合同授業の方が集中して授業に取り組んでいるのだ。授業への集中力については、学生の「いつもと違うことをすると興味とそれに対する集中力がでますね」（平成29年度）という意見が興味深い。学生にとって合同授業にはいつもの授業とは異なる、一種の行事として位置づけられており、学生が気分を変えて授業を受けられることで、授業に対する姿勢が改善できている。

外国語学習は継続的に行わなければ能力も伸びない。それは、資料読解能力も同様である。一方で、合同授業は、継続して行うよりも、彼らの気分転換を促し、気軽に参加できるような形態で行う方が適切であると、現時点の学生の反応から判断できる。課題設定を含め、合同授業が、学生にとって新鮮で、印象に残るものであれば、合同授業への満足度が向上し、さらに関心を引き出せるだろう。



【グラフ6】『ヴェニスの商人』を読みたいと思ったか



【グラフ7】シェイクスピアのほかの作品を読みたいと思ったか

<sup>15</sup> 学生の普段の読書量等の調査はしておらず、読書傾向との関連性は不明である。

<sup>16</sup> 池田真「言語能力から汎用能力へーCLILによるコン

ピテンシーの育成ー」早稲田大学教育総合研究所 [2017], 10-11 ページ。山崎[2017], 32 ページ。

## 5. 終わりに

以上が、英語総合 I と歴史 I の合同授業の授業実践の報告と分析である。すなわち、現時点では、合同授業は、実施そのものに否定的な意見は少なく、目的の一つである歴史的事象への深い理解を促すことは達成できているが、もう一つの目的である英語圏の文化への関心の引き出しという目的を達成できていない。しかし、合同授業は、年度によって異なるものの、半数以上の学生は通常の授業に比べ、集中して取り組んでいる。こうした授業への姿勢の改善がもたらされることは、合同授業の効果として指摘できる。

今後は、合同授業の方法を改善しながら、目的の達成を目指したい。

最後に、合同授業を共に実施した本校教養教育科酒井康宏教授には、合同授業の内容や、翻訳を含む資料作成、本稿の執筆に関して数多くの助言をいただいた。また、本校電気情報工学科浅倉邦彦准教授には、本校のグローバル人材育成事業について、本稿の執筆に際し多大なご協力をいただいた。両先生には改めて感謝申し上げる。

### 【参考文献】

1. 斎孝則『『ヴェニス商人』論—シャイロックを中心に—』『桜花学園大学人文学部研究紀要』5号, 2003年, 191—199 ページ。
2. 笹島茂編著『CLIL 新しい発想の授業—理科や歴史を外国語で教える! ?—』三修社, 2011年。
3. 福井憲彦・田尻信壹編著『歴史的思考力を伸ばす世界史授業デザイン』明治図書, 2012年。
4. 山崎勝「クリル、協調学習とオーラル・メソッド」『語研ジャーナル』16巻, 2017年, 28—32 ページ。
5. 歴史学研究会編『世界史史料 5 ヨーロッパ世界の成立と膨張』岩波書店, 2007年。
6. 早稲田大学教育総合研究所監修『英語で教科内容や専門を学ぶ—内容重視指導 (CBI)、内容言語統合学習 (CLIL) と英語による専門科目の指導 (EMI) の視点から—』(早稲田教育ブックレット No.17), 学文社, 2017年。